

大ロシア南部の「祖先ぬくめ」の習俗について

坂内徳明

1

パーヴェル・メリニコフ(筆名アンドレイ・ペチェールスキイ)の代表作である大長篇小説『森の中で』(一八七一年—七四年)はロシア文学の歴史の中でもきわめて特異な作品である。すぐれた文学史家ボリス・エイヘンバウムはレスコーフを論じるとき、十九世紀前半までの文献学的風潮、スラヴ研究と民衆の世態への関心の高まり、そしてプーシキンからダーリ、ヴエーリトマンへと連なるロシア散文の流れなどが芸術性と結びつくことによってレスコーフの文学が生まれたととらえるが、メリニコフもやはりこうしたレスコーフと同じ土壌から生まれた作家であった。メリニコフがその作品の中で特に何べージにもわたって続ける民俗記述は、「今もって民族誌家たちを喜ばせ²⁾」ている。『森の中で』第一部第二章の冒頭に新年のクレシチェーニエ(一月六日の主顕節)の興味ぶかい行事が記述されている。すなわちこの物語の主人公であるチャプリーンの一

家がこの祭日を祝って聖なる水を飲む場面や、村の若者たちが「アフセーニ」と呼ばれる儀礼歌を歌いながらねり歩く光景の描写に先立って、次のように述べられているのである。

百姓たちは馬のまわりで忙しく立ち回る。というのは、クレシチェーニエ前夜に持ち主がひずめをきれいにし、やめた馬は一年間びっこをひかず、病気になることが知られているからだ。この縁起をかつぐ百姓たちは、女たちの儀式を信用せず、ぶつくさ言いながら、庭のまん中で家畜の糞をひっかきまわしている。それは、女たちがあの世の祖先に暖まってもらうようにと夕方からこっばの束を燃やしたあとに火が残ってはいまいか、を調べるためだ……

ここで「あの世の祖先に暖まってもらうように」と記されているのは、いかなる意味を持つのか。そして、そのためにこっばを燃やすのはなぜか。メリニコフがこの風習に関してより詳しい説明を加えていないのは、これが当時のロシア人にとってよく知られた風習であった故かもしれない。このノートでは、「祖先を暖める」という習俗がどのようなものであり、ロシア人がそれにいかなる意味を与えていたかを考えてみたい。

2

まず他の資料を参照することからはじめよう。ウラジミール・ダーリは彼の『大ロシア語辞典』ならびに『ロシア人の諺』の中で、ウクライナに接するクルスク県における事例として、「キリスト降誕祭とクレシチェーニエには、あの世の祖

先に身体を暖まってもらうようにと、庭の中央で家畜の糞を燃やす⁽⁴⁾風習があることを記している。

同じくクールスク県北東部シチェグロフ郡の儀礼として一八八〇年に報告された記事は、この習俗の全容をかなり詳しく伝えてくれる。

クレシチェーニエの朝には必ず、女たちがベチカを焚くよりもずっと早い時間に、農家の庭から立ちのぼる煙を目にするだろう。これが「祖先をしのんで暖める」という風習だ。人々は自分の寢床のわらを庭へ運び出し、その上にいろいろな種類の穀物の種や飼料やわずかな香をのせ、それらを山のようにかき集めて火をつける。長靴をはき、凍える手を暖めながら丸くなって立つ者たちは、当然の事ながら、次の事を疑わない。自分たちには見えない「御先祖さま」が自分たちと同じように凍えながら実際に立っており、しかも自分たちと同じく彼らが長靴と脛当とを脱いで、その罪深い足を香で浄められた火にあてて喜んで、と。クリスマス週間の間ずっと、このような朝の焚火が続けられているが、それが何を物語っているかは忘れられて久しく、すでに昔あった意味を失なってしまうている。庭に散ったわらと家畜の糞を集めて山にし、香をのせて火をつけるのだ。これは「糞を燃やす」と呼ばれている⁽⁵⁾。

さらに、セルゲイ・マクシーモフの報告の中にも多くの場所、特にタンボーフ、オリョールの両県内で「祖先を暖める」儀礼が見出されると記されているが、それは次のような内容のもの

である。つまり、降誕節第一日目に庭の中央でわら束を燃やす、この時に死者たちが墓から起きあがってその身を暖めるためにやって来ると信じられている。この儀礼にあたって家の者は全員が火を囲んで丸くなり、深い沈黙と厳肅な雰囲気とに包まれる。あるいは別の地方では、ラードニツァ(復活祭後第一週すなわちフォマーの週末曜日の招魂祭)や同じフォマーの週の輪舞⁽⁶⁾の時のように、焚火のまわりを手を取り合って陽気にめぐるといふ。

時を同じくして、つまり年末から年のはじめにかけての「スヴァートキ」(十二月二十五日から一月六日までのクリスマス週間)の時期に、祖先ぬくめの儀礼と類似した風習があることが知られている。すなわち、クレシチェーニエの日に朝の勤行を告げる鐘が鳴ると、人々はただちに動きだす、敬虔な人々が家の前で火を燃やすからだ。その目的は「ヨルダン川で洗礼を受けたイエス・キリストにその火にあたってもらうため」である⁽⁷⁾。しかしここで問題となるのは、このクレシチェーニエの焚火が同じその日に冷水に身を浸す行為との関連で行なわれていることである。この時期の大変な寒さの中で水にはいる、時には水に穴をあけて水につかるという風習が「記憶の中にある」古き時代のもの⁽⁸⁾としても、水からあがった後に身を暖める火が欠かせぬものであったろうことは容易に想像できるだろう。そして二週間近くにも及ぶスヴァートキが遊興と快楽に満ちたものであるならば、その終了時に日常の生活へ復帰するためのけがれ落としの禊的な儀礼行為が必要なのは当然である。それ

では、クリスマス週間の焚火が水浴後に自分の身を暖めるためではなく、祖先をぬくめるためと考えられているのは、どのような意味を持つのだろうか。

今世紀初頭から五十年代まで、方言学・フォークロア・民族学など実に幅広い分野にわたって活躍したロシア・ソビエトの代表的民族学者ドミートリイ・ゼレーニンは『祖先ぬくめ』の習俗(一九〇九年)と題する十六ページの小論文をこの民俗の考察にあてている。その中で彼はまずこの習俗に関する八つ(追補も含む)の記述を紹介し、それらの詳細な分析を通じていくつかの興味深い指摘を行なっている。地域によって小さな相違があるとはいえ、この習俗の中心が「しばしば穀粒や香とともに、わら、あるいは糞を儀礼的に燃やす」ことにあると述べた彼は、この儀礼の記述を次のように整理する。それを紹介しておくならば、

儀礼の呼び名——「糞を燃やす」「蒲団くずを燃やす」「わらの燃えさしを燃やす」「祖先をしのんで暖める」「祖先をいぶす」最も一般的なものとして「祖先をぬくめる」

儀礼の行なわれる時——クリスマス週間の間ずっと、降誕祭第一日目、その前夜、クレシチェーニエ、その前夜、または降誕祭・新年・クレシチェーニエの三回——一日の中では早朝と夕刻

儀礼の場所——一つの事例が村はずれである他はすべて庭で儀礼を行なう者——家の主人という記述はあるが他はなし(見物人として家の者が加わる場合はある)

全体の調子——沈黙、荘厳な中で、口の中で祈りを唱えながら、丘や東方を見つめながら

焚火の材料——家畜の糞(肥料)、寢床のわら、わら(束)、穀粒、家畜飼料、香(香は後代のキリスト教の影響によるものと考えられる)

儀礼の行なわれる地域——クールスク、オリョール、タンボーフ、ヴォローネシ諸県といった大ロシア南部の中央黒土地域

右の整理を通じてゼレーニンは、祖先ぬくめの習俗が祖先崇拜、ならびに農耕をめぐる崇拜という二つの意味を持つと判断する。すなわち、行事の過程に「焚火の火によって麦が実りますように」という祈りの言葉があること、また、焚火の材料として当然用いられるはずの薪が全く見出されず、そのかわりに家畜の糞、わら束、穀物の種が使われること、さらには地域が中央黒土地帯に限られること(ただし、最初にあげたメーリニコフの記述が奥ヴォルガのものであることには問題が残る)などから、この習俗が収穫を祈願し、家畜の増殖・多産を願うものだとする。そして儀礼の呼び名自体、ならびに家の精ドモグォーイとの関連は明らかに祖先崇拜を示している、と説明する。こうしたゼレーニンの意味づけは基本的には正しいと考えてよいが、より詳細に検討する必要がある。

3

年末から年始にかけての時期が家畜と結びつくことは確認で

きるであろう。新年一月一日が八月十八日(馬の祭日)とならぶ家畜の祭日であり、特に聖ヴァシーリイの日として豚が祭られること、およびオリョール県から報告された次の儀礼とがその結びつきを裏付けている。それによると、クレシチューニエの朝早くミサを終えた人々は家にもどって祭日を祝うが、この時に家族の者はそれぞれイコン、香炉、斧などを手に、また主人は外套を裏がえしに着て、「聖体示現の水」をいれた皿を手にしてこの儀礼にのぞむ。こうした準備がすむと全員は家畜小屋へと向かう。行進は莊嚴に、完全なる沈黙のうちにこなわれ、小屋では家畜の頭上に聖なる水が注がれ、この日のための特別の餌が与えられるのである。こうした儀礼は、同じくクレシチューニエに星を見て家畜の安全を占い願うといった習俗とともにひんばんに行なわれたものだが、「何のために家畜を浄めるのか?」との質問に対する農民の答は注目すべきものである。いわく、神のためにであり、疫病から守るためにであり、家の精ドモヴォーイをなだめ、家畜の餌を奪われぬようにするため——その答は、この儀礼が悪霊の悪戯から家畜を保護しようという**祓禊儀礼**としての性格を持つことを示している。それでは、ここで言及されたドモヴォーイをはじめとして悪霊たちは十二月から一月にかけての時期に、一体どのような活動をするかと信じられているのだろうか。

十二月末から一月、さらに二月までの民間歳時曆を参照してみると、そこに登場する悪霊の活動はかなり活発なものがある。十二月二十六日以降、悪霊たちは地上を訪れて禿山へ向かい、

そこで大騒ぎをくりひろげたり(六月末に魔女をはじめ悪霊が禿山に飛んで行くという有名な俗信とつながるであろう)、夜の散歩をしたり、湖や川のあたりをうろつく(一月一日)。さらには「聖マラーヒヤ(一月三日)には腹をすかせた魔女が雌牛の乳をしぼり取り殺してしまふ」ので、こうした悪戯に対処する形で、三日には門にたいまつを結びつけておいたり、村から悪魔を追いはらったり(四日)、そして六日のクレシチューニエの浄めが行なわれたりする。さらに「聖アフナーシー(一月十八日)には呪術師が悪霊を退散させ」「エフレーム・シーリン(二十八日)にはドモヴォーイのため炉の口に粥を供えてなだめる」といったものがある。二月にはいって悪霊をはらう習俗は一日、五日、十一日聖ヴァラーシイの日をはじめとして、その後にも見出される。そして基本的には、月の末日を飾る聖カシヤーンの日(二十九日)をもって悪霊との争いが終わると考えてよいであろう。というのも、農耕の聖者として農民に信望の厚いニコラと対照的に考えられているカシヤーンイメージは、言わば疫病神として冬そのものの象徴であり、彼はまさしく春の直前に位置しているからである(三月一日——アヴドーチヤの雪のしずく、つららの滴り、春との最初の出会い)。

しかしながら、こうした悪霊たちの中でドモヴォーイが他の霊とは異質の性格を持つことを見のがしてはならない。エルナ・ポメラーンツェヴァはドモヴォーイをめぐる伝承が他の自然霊(水の精、森の精、ルサールカ)と比較してきわめて安定

した特徴を持っていることを述べて、その伝承を四つのテーマに分類する(1)家人との関係・吉兆の予言(2)家畜との関係(3)新居への招来(4)他の霊との関係)。そしてこの四つのテーマを通じて根本的にはドモヴォーイが人間にとって恐怖の対象でなく、害をなさぬ存在であると指摘している。では、こうした性格はどこに起源を持つのだろうか。これを考える上で参考になるのは、先にもあげた二月十一日の聖ヴラーシイの日の習俗である。すなわちこの日には、家畜を病氣から守り、その健康と安全を保障するために、厳寒の中を小屋の外へ家畜を放つ。あるいは、家畜小屋にはいつて牛・馬・鶏などの動物に聖水を注ぎ、香をたて、片隅には浄められた柳の枝を供えるのである。そしてこうした儀礼に必ず登場する聖ヴラーシイのイコンは、言うまでもなく、その後キリスト教以前の異教時代の神格ヴォロス(ヴェレス)に対する信仰を思い起こさせるであろう。「家畜」を意味するロシア語 *дом* がかつて「金銭、財産、税」をも意味した⁽¹⁶⁾ことでも明確に示されるように、家畜が古代社会の中できわめて重要な存在であったことは家畜の守護者としてのヴォロスの信仰を生み出した。そしてこの信仰は、家畜の守護者、さらに富の神(商業の神)としてのヴォロス信仰へと展開し、またキリスト教との融合によって聖ヴラーシイの信仰へと発展していったと考えてよい。とすれば、家畜に災いをもたらすとされるドモヴォーイをなだめる儀礼は、聖ヴラーシイの信仰と結びつき、さらにはドモヴォーイに対する信仰そのものが家畜を介在することで聖ヴラーシイの信仰とつながっている

のである。

ところでゼレーニンの指摘によれば、スヴァートキの焚火の材料になるものの中で、家畜の糞と小ロシアで見られるごみとは注目すべきものであるという。というのも糞は庭に住む家畜のシンボルであり、ごみは言うまでもなく、家の中に生活する者のシンボルであるということから、この両者はともに家の神に属するものと考えられるからである。このことはさらに、ドモヴォーイには家に住まう霊(домовый-домохозяин)と庭に住む霊(домовый-дворовой)の二種がある、という指摘と考えあわせるならばより興味深い。この意味で、同じ屋敷内にありながらも家の内と外という二つの生活空間が排出したごみは「家畜、そして家事全体の守護者であるドモヴォーイへの象徴的な供物」という役割をはたす⁽¹⁷⁾(傍点——坂内)のである。そしてこのゼレーニンの示唆の多い言葉の延長上に祖先崇拜を考える必要があるだろう。

今ここで問題にしている時期以外に祖先のために火を焚く風習を見出すことはできないだろうか。ウラジーミル・ブローフは一年のサイクルの中から祖先の追悼という要素を持つ祭を選び出しているが、それによると、その要素はスヴァートキ、謝肉祭、セミック(復活祭後第六週目)、トロイイツァ(聖神降臨祭)、ラードニツァ等に見出されるとい⁽¹⁸⁾う。しかしながらここで注意しておかねばならないのは、スヴァートキを除いて他のいずれの祭にも焚火が登場しないことである。そして六月末のイヴァン・クパーロの日に燃やされるよく知られた焚火が祖

先崇拜ではなく、水浴後に身体を暖める、ないしは身を淨めることにその目的があることを考えるならば、スヴァートキにおける火と祖先崇拜との結びつきは大きな意味を持つものとしてとらえることができるだろう。

だが、年間の儀礼をより細かく見ていくと火と祖先崇拜との結びつきを持った儀礼がないわけではない。すなわち、謝肉祭やトローイツァ、ラードニツァに死者との共食をするという儀礼の習俗が、その炊事のためであった焚火をともなったことはわずかな事例ながら知られている。また、十六世紀半ばに制定された法律百ヶ条には「聖木曜日（四旬節第五週の木曜日、復活祭の三日前——坂内）には、朝早くわらを燃やし、死者を呼びよせる」とある。復活祭を大きな中心とするその前後の時期は、祖先の追悼によって死者をも農耕のサイクルへ参加させるという春の農耕儀礼の基本テーマを持っていた。教会側が復活祭の時期に死者追悼を行わず、墓へ出かけることを時には禁ずることまでしたにもかかわらず、民間の習俗は教会の儀式と融合しつつ、春の祖先追悼の儀礼を展開していったのである。この融合を示すものとして、三つの木曜日（聖木曜日、復活祭の週の光明の木曜日、そしてセミークの週の木曜日の三つ）が死者追悼と結びついていたことがあげられる。そして特に、聖木曜日（民間の歳時暦の中ではドモヴォーイの祭日であるという俗信²³）は大きな示唆を与えるものであろう。

このように「祖先ぬくめ」の習俗を考えると、この小さな民俗の背後には非常に複雑で多岐にわたる問題が横たわって

いることがわかる。この儀礼は十九世紀にはほぼ消滅したと言われるが、糞を燃やすことから家畜と結びつき、なおかつ、祖先と肩を並べて焚火に手をかざすというきわめて視覚的イメージを持つ点で、独特のものであった。一、二月の儀礼が全体としては悪霊を追いはらう祓禳儀礼の性格を強く持つとはいえず、祖先ぬくめの習俗には、焚火の材料が示すようにむしろ豊饒との結びつきを示す色彩がより濃く現われている。それは、しかし直接的なものではなく、死者との関わりを通してのものであり、この点で、農耕呪術と祖先崇拜とを単に並列的なものとしてとらえているゼレーニンの分析には問題があると言える。プロープが明らかにしたように、死者を追悼し、死者に食事や暖を与えることは死者に対する単なる追懐ではなく、收穫祈願の機能を持つのである。そして具体的には、農耕呪術的要素と祖先崇拜とは、年末から年始の厳寒の中で地中の死者を暖める「祖先ぬくめ」の儀礼においてひとつに重なり合っているのである。

「祖先ぬくめ」の焚火から立ちのぼる煙は、かまどや煙突の煙と同じく、はるか天なる祖先へと連なるものである。かまどは、そこで日常的に火を取り扱うために、ロシアでも家の神が住まうとされて古代から聖なる場所として信仰されてきた。そしてかまどから出た火と煙が通過する煙突は、逆にこの道を通ってあらゆる神秘な力が訪れる点で、やはり聖なるものであった。ロシア神話学派の言い方になぞらえるならば、煙は、火の持つ聖性とそれ自身の天空への上昇とによって、聖なる至高の

この一節を引きながら十九世紀大ロシア南部にはこの習俗は見られなると記している。Сахаров, И. П., Сказания русского народа, т. 2, СПб., 1885, стр. 223.

(21) Чичеров, *op. cit.*, стр. 533—4.

(22) Зеленин, *op. cit.*, стр. 14.

(23) Пропп, *op. cit.*, стр. 17. * * * 注 6 (8) を参照。

(24) Чичеров, *op. cit.*, стр. 529.

(25) 彼は他の個所で、降誕祭の儀礼食がかつては祖先崇拜のために捧げられたと指摘するが、儀礼食そのものの機能ならびに祖先崇拜とどうより重要な問題に及れていなら。Zelenin, D., Russische (Ostslavische) Volkskunde, Berl.-Leipz., 1927, 375.

(26) Афанасьев, Велун и ведьма, стр. 116.

(一橋大学大学院博士課程)